

木曾定勝寺の建築について

杉 野 丞・沢 田 多喜二*

A Study on the Buildings of Jōshōji Temple in Kiso

Noboru SUGINO and Takiji SAWADA

The buildings of Jōshōji Temple were built in early Edo period, which were designated as important cultural property.

Though it was important to know the buildings to understand the original architecture of Rinzaï Zen Sect, we had no treatise about them until now.

Therefore we have studied to restore them to their original state by finding traces of the repairing works done after it was first built. And we explained the characteristics of the architecture of Rinzaï Zen Sect in early Edo period.

はじめに

木曾の定勝寺は、臨済宗妙心寺派に属し、木曾三大寺（定勝寺、興禅寺、長福寺）の上位におかれた木曾氏の菩提寺である。『木曾名所図会』の中山道の一郭に載る境内全景の姿は、今日もなお残され、本堂、庫裡、玄関、山門はすでに重要文化財に指定（昭和二十七年）されている。

しかし、これら本堂、庫裡、玄関、山門の各堂宇は、近世初期の禅宗寺院の伽藍と建築を知る上で重要な存在でありながら、これまでに十分に論じられていなかった。そこで本稿では、本堂の復原を中心に庫裡、玄関、山門の各建物とそれらの寺院構成について述べ、近世初期の臨済宗寺院建築の特色を明らかにする一端としたい。

1. 創立・沿革

当寺は、嘉慶年間（1387～1389）に木曾氏十一代右京太夫親豊が先祖追福のため創建したもので、初屋和尚を開山とする⁽¹⁾。七堂伽藍をそなえていたといわれる最初の建物は、文安5年（1448）の木曾川の洪水によって流失した。このため、享徳4年（1455）木曾氏十四代家賢は鎌倉五山浄智寺の香林慧厳和尚を招請して寺中島に再建し、香林和尚を中興開山とした⁽²⁾。そして、再建はその後文明から延徳年間（1469～1492）の貴山恵珍和尚代まで続けられた⁽³⁾。この間の伽藍はかなり整っていたもののように、第七世天心宗球和尚代の永禄5年（1562）に仏殿の屋根葺替⁽⁴⁾、同11年（1568）に客殿上葺⁽⁵⁾、同13年（1570）に山門、総門、鐘鼓堂の上葺を行ない⁽⁶⁾、更に元

亀3年（1572）に風呂建立⁽⁷⁾、天正2年（1574）から仏殿と唐戸の修理を行なって⁽⁸⁾、天正9年（1581）に総門を再建する等の記録が残る⁽⁹⁾。このように、文安5年以後の再建では客殿、仏殿、山門、総門、鐘鼓堂、風呂等かなりの建物が整えられていたことが分かる。

ところが、この伽藍も文禄4年（1595）の木曾川の大洪水により再度流失する。その後木曾氏十九代義昌がこの地を追われると、豊臣秀吉の木曾代官犬山城主石川備前守光吉が入府し、慶長3年（1598）木曾義在の館跡⁽¹⁰⁾に現在の伽藍を再建した。そして、この慶長期の本堂が現在残される。その後庫裡が承応3年（1654）、山門が万治4年（1661）に建て替えられ⁽¹¹⁾、玄関も享保年間（1716～1736）に再建されている。

2. 寺院構成

定勝寺 長野県木曾郡大桑村須原831-1

敷地は、木曾谷の東側山麓の小高い地におかれ、西に開けた地形となる。この敷地の西下方に旧中山道が南北に通じ、これより東に向って参道が伸び、これを登ると山門に至る。

更に山門を潜って東に進むと、その北に本堂、庫裡、玄関が建ち並ぶ。本堂は、敷地北側に南面して建ち、この東に建物前面を略一致させた庫裡が置かれ、これら二つの建物の間に玄関が造られる。本堂前方では、中央に中門を備えた木塀が前庭を囲っている。そして、山門から東に進んだ参道は、この玄関、庫裡前方で鉤の手に曲って各建物前面に達する。（図-1）（写真-1）

このように、本堂、玄関、庫裡は建物の前面を略揃え

* 愛知工業大学研究生

て横一列に並べられ、本堂前方には塀で囲われた前庭を設けられ、山門も本堂の中心軸上からは外される。このような配置例は、後世地方の格式の高い近世臨済宗寺院の中には多く見出すことが出来る⁽¹²⁾。(岐阜県：美濃市清泰寺、岐阜市崇福寺、八百津町大仙寺他)

3. 定勝寺の建築

3-1 本堂の復原



写真-1 境内全景

本堂は、慶長3年以後2度の大きな改造を受けている。一つは江戸時代中期に来迎柱を付加した時で、仏間と堂両側背面にも手を加えており、また一つは大正末年から昭和初年にかけて開山堂、位牌堂を付加した時である。この他はよく保存されているから、これらの改造部分を中心に復原してみたい。

本堂は、桁行3間(実長9間半)、梁間3間(実長6間)、入母屋造り、柿葺き(現在銅板葺)、妻は木連格子、破風拜みに蔭懸魚鱗付を付け、軒一軒疎垂木・木舞打ちの南面建ちの堂である(写真-2)。室内平面は、正側面3方に幅1間の広縁を廻し、この内方に前後室奥行を3間、2間、間口を室中3間半、上・下の間⁽¹³⁾各2間とする整形6室の方丈形式を取り、この周囲に濡縁を廻らす(現在背面の西半で下屋に取り込まれる。)。軸部は後補の来迎柱とその奥2本を丸柱とする他はすべて面取角柱とし、柱は堂前面で5寸6分(面内4寸8分)、その他で5寸3分(面内4寸5分)を用いて、柱上には舟肘木を置いてない。計画寸法は、柱心割りの6尺1間を基準とし、広縁幅も6尺3寸に定めている。

堂周囲は、古式な方丈のように広縁外を吹き放しとせ

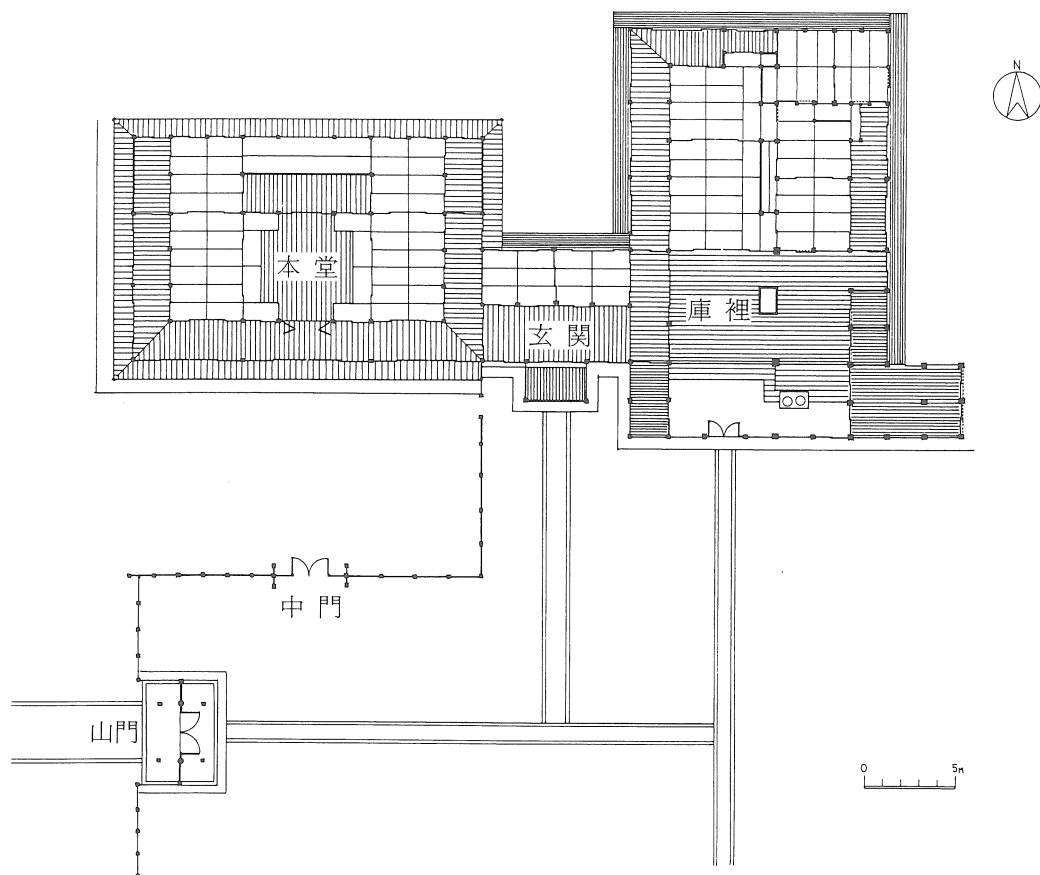
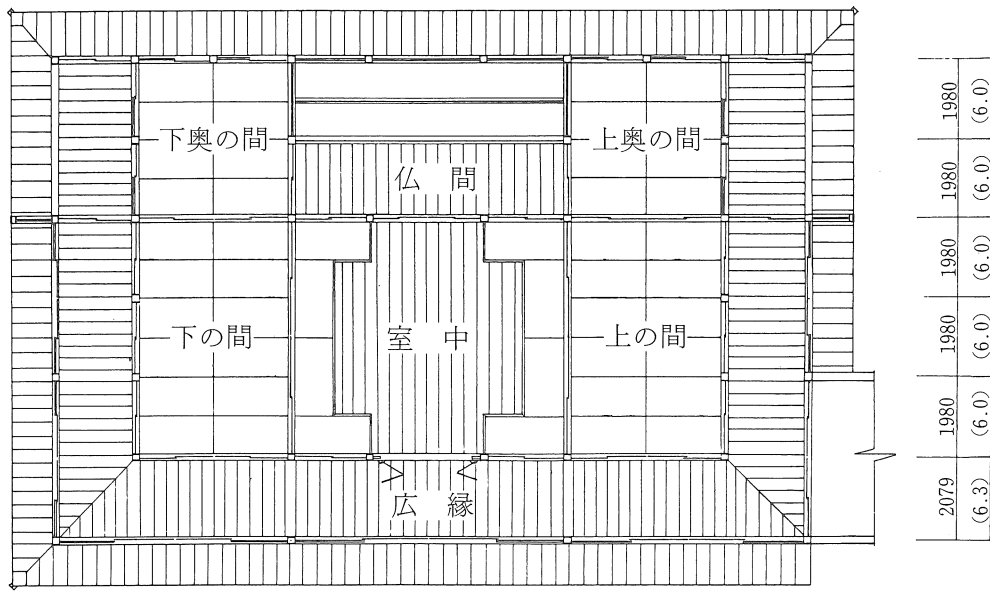


図-1 定勝寺復原配置図(江戸中期)



2079	3960	1980	2976	1980	3960	2079
(6.3)	(12.0)	(6.0)	(9.0)	(6.0)	(12.0)	(6.3)

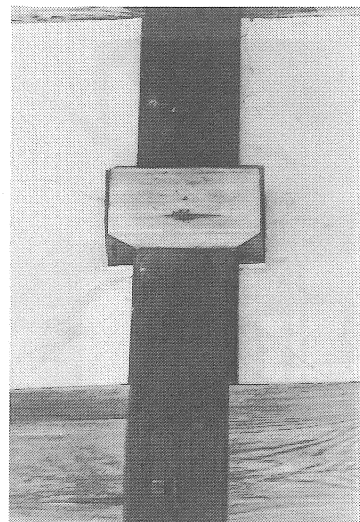
図-2 本堂復原平面図

ず、ここでは当初から広縁外に建具を入れたらしい。堂前面では中央を3間半、両脇各3間、両側面を2間々隔の広い柱間にとり（東側面では江戸中期の玄関造り替えの際に柱間を手前1間半2つと次1間に改めている。）、各柱間には縁長押、敷・差鴨居を通し、内法上では柱間中央に釣束を立てて白漆喰壁を入れる。しかし、堂前面3間では内法上に横一列に連子を並べた明り窓を造り、各柱上の軒桁には水繰りを施している。周囲の建具は、現在正面中央で4、両脇で各3が嵌められ、両端に雨戸の戸袋を備えるが、これは旧差鴨居下端に新らたな鴨居を打って戸締りした時のもので、当初は堂西側面の手前2間にみられるような板戸4、障子2を装置していた。ところが、両側面後端の柱間では、他の堂周囲柱間とは

異なったいくつかの痕跡が認められる。現在この柱間には敷・差鴨居に板戸4、障子2を入れているが、内法上小壁からは両脇2本の柱上飛貫位置に内部広縁から延びた長押が枕^{まくらさば}捌きとなって突出し（写真-3）、内法高（これは堂内の内法高で、差鴨居より1尺程下方）にも長押が枕捌きとなった痕跡が残る。更にこれら両側柱の手前の各柱外面には、内法の下方に間渡しの取り付け痕跡が残



写真-2 本堂全景

写真-3 本堂西側面後端より2間目の柱上
（長押の枕捌きが小壁から出る）

され、しかも堂内広縁と室境の各柱外面には風蝕が認められることから、当初両側広縁の後半は軒桁下を開放として、後端より2間目の各柱外には脇障子が備えられていたことが分かる。(図-2)

堂内は、現在前面広縁の西半から西側広縁前半と東側広縁が畳敷きとされるが、当初正面側3方の広縁は板敷きとされ、天井も鏡天井とされて、両側広縁の手前より3間目が杉戸各2(東に獅子、西に花鳥が描かれる。)により間仕切られた。また室中両側の柱列前端的柱上からは、2つの海老虹梁(差肘木付)が堂前面の各柱にかけて渡され、ここで唯一慶長期を示す絵様を見ることが出来る(写真-4)。広縁と室部分の境では、室中前面で中央を1間半、この両脇各1間、上・下の間前面実長2間、室部分両側で1間毎に柱を立て、柱間に他の各室同様敷・鴨居、内法長押を通して、内法上小壁とし、飛貫位置と天井廻りに2本の長押を通して。これら柱間の建具は、現在すべて外されるが、当初は2乃至4枚の引き違い戸を入れていた。

室中では、正面中央で両脇柱内側に方立を打ち、内法上の貫と敷居に藁座を打って双折棧唐戸を吊っている(写真-5)。室中と上・下の間境では、内法を背違いに高めて差鴨居を通し、内法上に竹の節欄間を置き、上部を開放として上・下の間共通の棹縁天井を張り、3室には蟻壁長押を一巡させている。またこれら室境の各柱相対面では、桁行の内法長押によって生ずる隙間を補うために方立が打たれており、当初ここに襖4枚が嵌められたことが分かる(写真-6)。一方この他の各室境の柱戸当り面にも、当初方立が打たれた釘穴が残り、建具の収まりに古式な手法を採っていたことが確認出来る。現在、室中は他の各室同様畳敷き(仏間板敷)とされるが、旧

床板が残されることから、当初は板間に畳廻り敷きとされたことが分かる。上奥・下奥の間前面では、内法上中央に釣束を立て襖4枚引きとされたが、この他の室境同様現在は建具を外している。仏間との境では、共に前1間に襖2を入れ、奥1間を板壁とする。ところが、下奥の間では現在大きな改造を受けている。

下奥西側面の奥1間に床の間を造り、背面の西側1間にも付書院を出し、天井もここでは低い棹縁天井が張られ、他の各室が高く棹縁を通して蟻壁長押を一巡させているのと異なっている。しかし、西側面中央の柱内方には長押の首切痕跡が残り、背面の付書院を出す両脇柱は他より細い角柱(4寸8分)に改められており、当初は

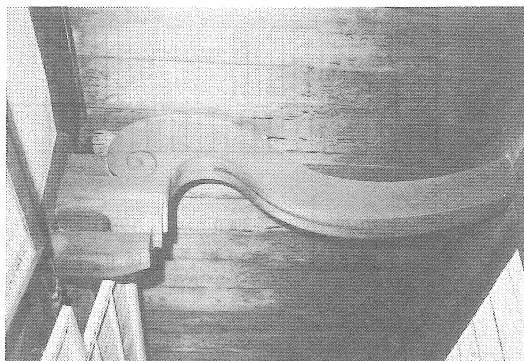


写真-4 本堂正面広縁上部の海老虹梁

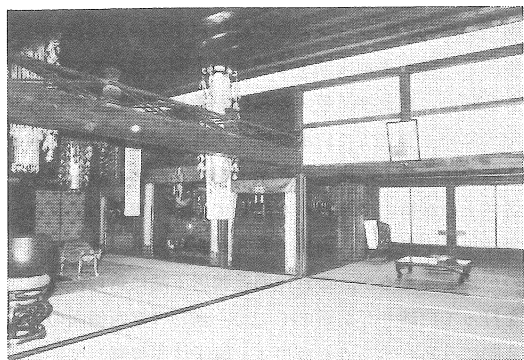


写真-6 本堂室中・上の間境

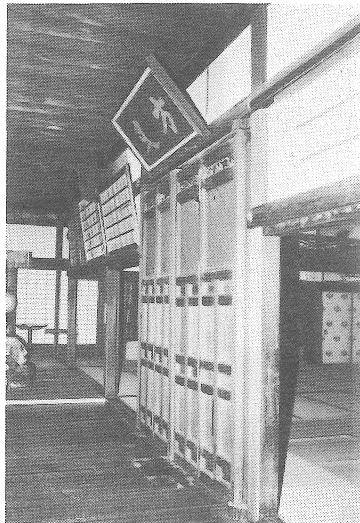


写真-5 室中正面の双折棧唐戸

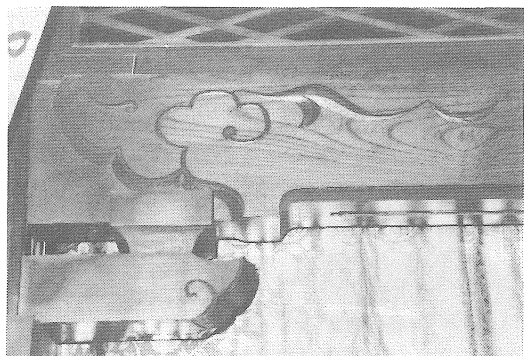
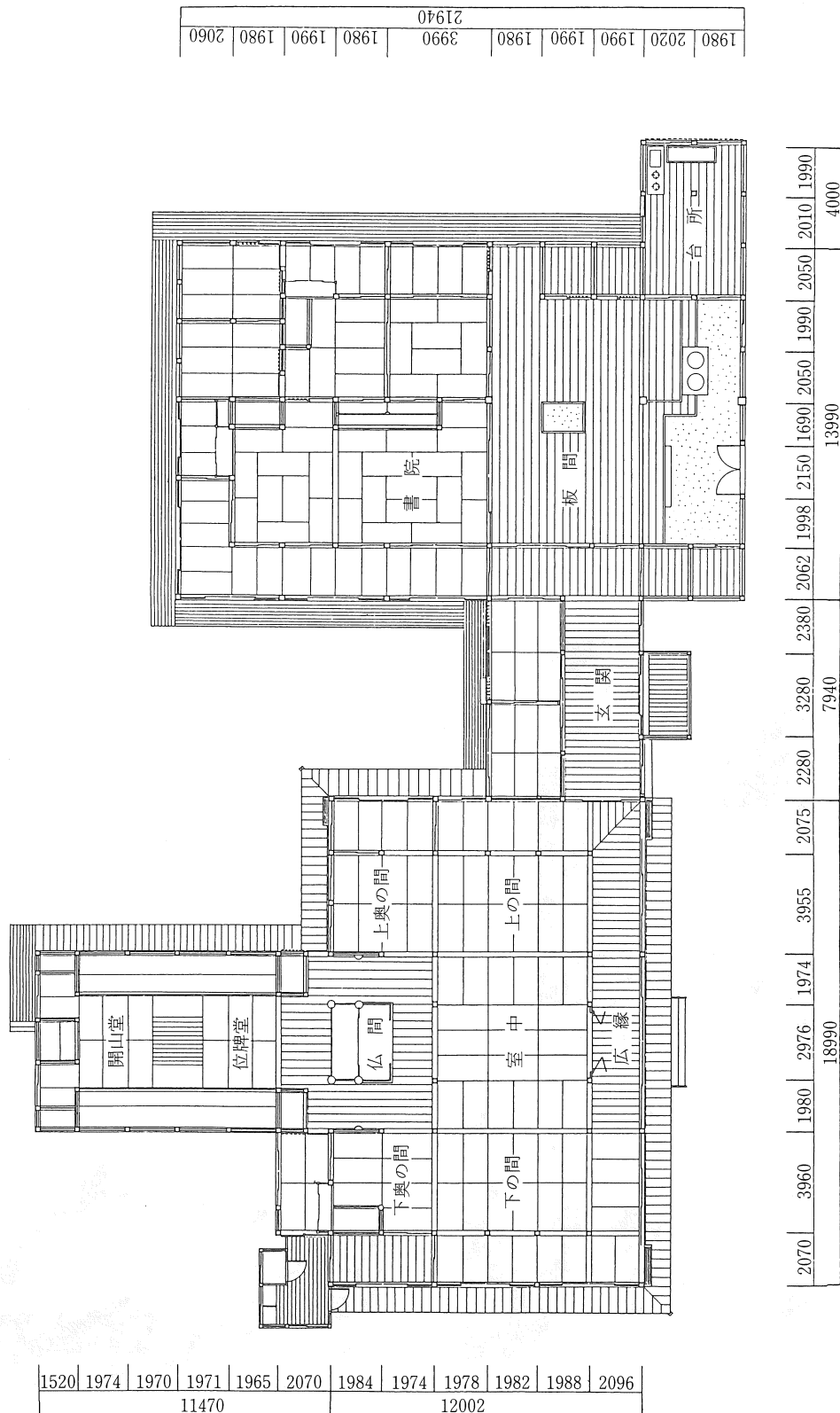


写真-7 本堂仏間正面中央柱間の虹梁(後補)



図一 3 本堂・玄関・庫裡現状平面図

床の間、付書院共に無く、天井も高く張られて、各柱間はすべて戸口とされたと考えられる。

次に室内では最も大きな改造のあった仏間の復原についてみてみよう。仏間は、前面を室中正面同様柱間3間とし、中央で内法を上げて虹梁（差肘木付）を入れるが、両脇柱相対面には旧鴨居の取り付け痕跡が残り、この虹梁の絵様の様式は前述の海老虹梁のものとは明らかに異なっており江戸時代中期のもので（写真-7）、当初仏間前面は両脇の内法長押が一直線に通り、中央で4両脇で各2の襖を入れていたことがわかる。

また両脇柱間上部には、現在内法上から蟻壁長押までの大きな吹寄菱格子欄間を入れるが、これら各柱の飛貫位置には旧貫穴が残され、当初両脇間内法上には小壁が入り、中央間のみ欄間を入れていたことが分かる（写真-8）。仏間内部では、現在前面より1間半後方に来迎柱を立て、前に擬宝珠高欄付唐様須弥壇を出し、後方にも2本の丸柱（大正末～昭和初の付加）を立てて仏龕を造っている。来迎柱上部には無目鴨居、長押、柱上に頭貫、台輪（端木鼻・花頭形を手前に出す）を通し、柱頂

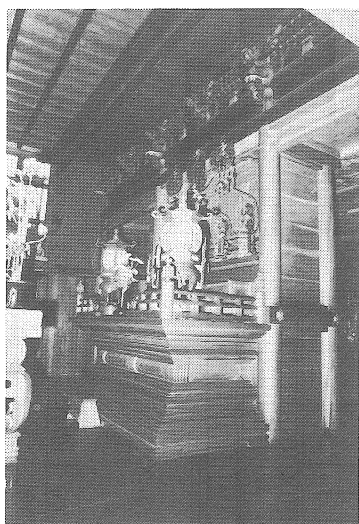


写真-9 本堂仏間内の来迎柱（後補）

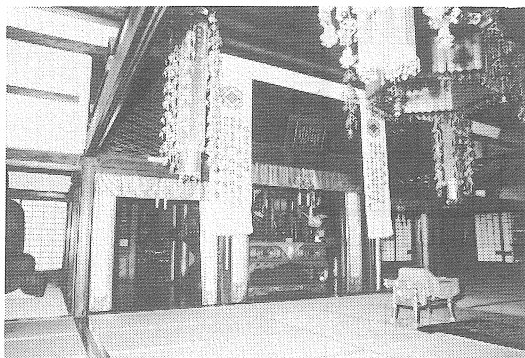


写真-8 本堂仏間前面

に出組斗拱、中備詰組と間斗束を置いて蛇腹支輪を通し、更にこれを来迎柱両脇に加えられた半丸柱まで延長するなど、来迎柱上部を派手に飾っている（写真-9）。しかし仏間両側手前より1間目の各柱相対面には床から腰高までの板が打たれ（旧仏壇框の取付痕跡を隠している）、柱上飛貫位置には旧大梁の仕口、その上部に前方の一面を一巡する旧蟻壁長押の取り付け痕跡が残る。そして、これら各柱上部の後方半間通りには、旧鏡天井が残され、来迎柱上部の斗拱等の絵様の様式は仏間正面中央の虹梁のものに一致することから、この来迎柱と上部の斗拱は江戸時代中期に付加されたもので、当初仏間は前1間通りを板間として、この奥に地履、束、羽目板、框からなる一直線仏壇を構えていたことが分かる。また、現在仏間背面は奥に1間拡張され、背面両隅に脇仏壇を置きこの間を位牌堂への通路にとっているが、内陣両側の手前より2間目の各柱は下奥背面に用いたと同じ4寸8分の柱を用いているから、これら背面列の各柱も来迎柱を付加した際に取り替えられたのではなかろうか。

一方、後方の位牌堂・開山堂は間口3間半、奥行5間の奥に深い建物で、中央に巾2間通りの畳敷きの通路をとって両脇に位牌壇をつくり、後方中央に開山を祀る仏壇を置くが、これらは大正末年から昭和初年にかけての工事によるものである。

このように、定勝寺本堂は当初京都の塔頭方丈にみられる6間取りの簡素な方丈であったが、正面側の広縁外に建具を入れた点で異なっていた。近世に入ると地方の臨濟宗寺院では、早くから広縁外を堂内に取り込むもの（宮城県松島・瑞巖寺（慶長14・1609）では落縁を取り込む）が現われるが¹⁴⁾、この本堂もそうした例の一つといえ、両側広縁の後半を開放とした点は庭等の戸外の観賞に便を図ったのであろう。

3-2 庫裡

この庫裡は、昭和27年に重要文化財に指定され、昭和38年に半解体修理が行われて今日まで保存されている。そこでこの建物については修理後の状況について眺



写真-10 庫裡妻正面

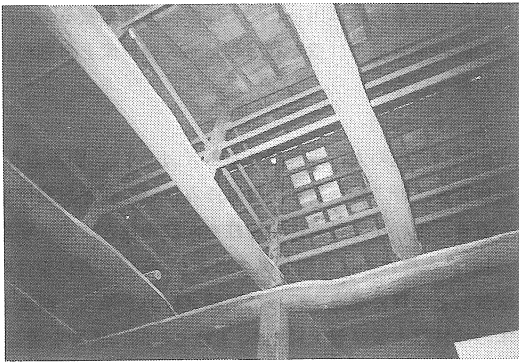


写真-11 庫裡土間・板間上部の梁組

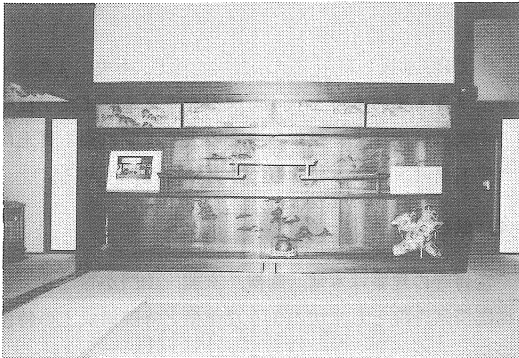


写真-12 庫裡書院18畳間の大棚

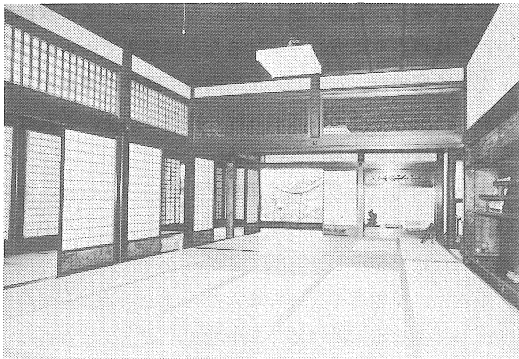


写真-13 庫裡的書院18畳間と奥12畳

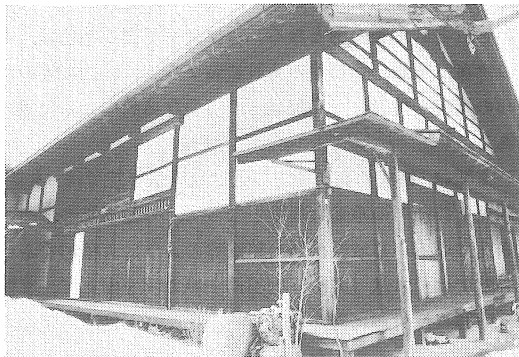


写真-14 庫裡を背面より見る

めてみよう(図-3)。

桁行7間(実長11間)、梁間7間(実長7間)、切妻造り、柿葺(現在銅板葺)、軒一軒疎垂木・木舞打、南面庇付きの妻入りの建物である。

間取りは、堂内前面2間通りを土間、この奥3間通りを板間、その後方6間を室部分とし、両側背面に濡縁を廻している。妻は、棟を高くって破風(蔦懸魚鰭付)を上げ、この間に柱、束、梁、貫を組み合せて妻壁を造り、庫裡正面を一層引き立たせている(写真-10)。柱は、棟通りに太い角柱(8寸8分)を立て、両脇に1間毎の角柱(5寸2分)を立てるが、庫裡入口が西端から3間目にとられるため、入口東脇の柱は東に4寸程移され、入口内側には両開き板扉を吊っている。この他の柱間はすべて板壁とされるが、東端から3間目は台所への入口とされ、板戸2、障子1を入れる。内法上では、各柱から持ち出し梁(持ち送り付)が出され、妻庇を支える。その上部は、すべて白漆喰壁とするが、妻の中央6間分には身舎梁が渡され、梁下には連子を横一列に並べた明り窓を造り、梁上部では下方の柱を束に代え、これを3本の貫で固めて母屋桁を支えるが、中央束間2間では舟肘木を載せて虹梁を渡し、この上部を開放にして煙出しを造り、虹梁の中央上に板臺股を置く。

内部は、土間、板間上部に高い梁組をみせる。土間・板間と板間・室境の棟通りに2本の大黒柱(10寸と9寸)を立て、前述の妻の太い角柱との都合3本の柱間には桁行の野梁を渡し、この上にこれと直交する梁行の野梁を1間毎に6本架け渡している。更に上部に束を立て、縦横に貫を通してこれを固める(写真-11)。

室部分は、棟通りで2分された西半分が晴として接客の場となり、東半分が藁として住持、修業僧の生活の場となっている。これら室部分の東西両外側には幅一間の広縁が通り、西側では背面までと、そこから東に鉤形に折れ曲って3間半延長され、東側では手前4間で止まる。室部分西半は18畳と12畳の2室からなり、18畳の東側に

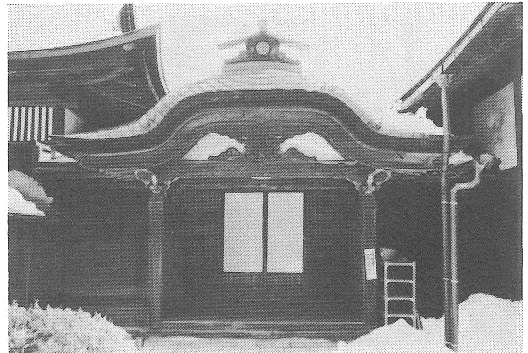


写真-15 玄関正面

は定勝寺棚と称する間口2間の大棚を構えており(背面の板壁に山水画を描き, 中央に櫓一枚板を一文字に通した冠棚)(写真-12), 奥12畳では北背面の東1間に付書院, 東側奥1間に床の間を設けている(写真-13)。また東半では手前の8畳2室は東側広縁から入ることが出来, 典座等の役僧の室としても使用が可能で, 共に前述の大棚背面を利用した奥行の浅い押入れをもち, 奥8畳には北側東1間に床の間, 東側奥1間に付書院を設けている。またこの奥の6畳2室は手前の広縁と室から入る入口以外に開口部がなく, 住職の衣鉢・財物の保管或いは就寝の室とされたのであろう。また, これら東半の各室にはすべてつし天井が張られており, 上部のつし二階への入口は, 東側面の軒下(写真-14)と板間・室境の東端柱間上部に設けられている。

3-3 玄関

玄関は, 間口2間弱, 奥行1間の式台と本堂と庫裡を繋ぐ巾1間半の渡り廊下, そしてその奥の6畳2室の控の間からなる(図-3)。式台は正面に棕付角柱を立てて出三ツ斗・実肘木付を載せ, 上部に虹梁を渡して板葭股を置き, 上に唐破風(兎ノ毛通し付)を備える(写真-15)。内部天井は棹縁とし, 両側には板壁を入れ, 長押を通して葭股を置き, 廊下境に縦舞良戸4, 障子2を入れる。2つの控の間では, 2室境に襖を入れ, 共に北側

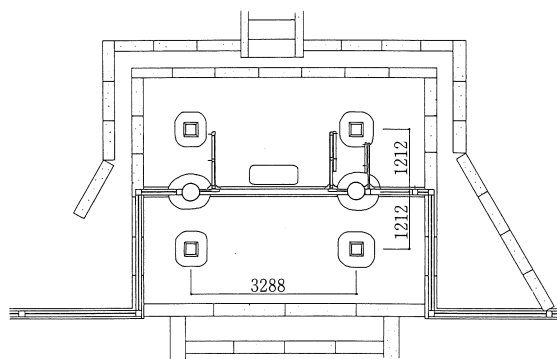


図-4 山門平面図



写真-16 山門全景

戸口から外の濡縁に出られ, 上に棹縁天井を張るが, 西控の間の本堂境には壁を利用した略式の付床と付棚が設けられている。

3-4 山門

山門は木柄の太い四脚門である(図-4)。切妻造り, 桧皮葺き, 軒二軒繁垂木, 破風拝みに三ツ花懸魚鱗付きを置き, 主柱を棕付丸柱, 控柱を面取角柱とする(写真-16)。主柱は控柱と同じ高さにとり, 柱間に方立を付け, 蹴放しと頭貫に藁座を打って両開き板扉を吊る。前後4本の控柱は木製礎盤上に立ち, 主柱との間に腰貫を通し, 各柱上に頭貫端木鼻を一巡させて柱間を固める。各柱上には出三ツ斗・実肘木付を載せ, 控柱間には詰組2を入れる。

妻では, 前後の軒桁を結ぶ虹梁を渡し, 中央に大瓶束・平三ツ斗・実肘木付を立てて棟木を支える。また主柱間の中央には内法上に葭股, 両妻の大瓶束間に通る貫上には平三ツ斗・実肘木付を置くなど堅固な門である。

4. 結び

定勝寺の建築は本堂, 庫裡, 玄関, 山門からなり, 近世臨済宗寺院として次のような建築と寺院構成上の特色を示した。

復原された本堂は, 広縁を3方に廻した6間取りの方丈形式を採り, 仏間に通し仏壇, 室中正面中央に双折桧唐戸, 柱戸当りに方立を設けるなど禅宗方丈の古式な手法をよく留めた。しかし, 正側面の広縁外に建具を入れた点は, 地方の近世臨済宗寺院の特色といえ, これはそうした遺構の初期の例といえる。

また, 両側広縁の後半を開放とした点は, 以後の多くの寺が周囲広縁を堂内入側に取り込む傾向をもつ中で, 過渡的な状況を示したとみてよからう。

庫裡は, 棟を高くとって雄大な妻壁をみせ, 土間, 板間上部にみせる梁組は細くて単純で, 縦横に渡る貫は繊細である。室は棟通りで左右に2分され, 本堂寄りの2室は書院として晴の場となり, 他方の諸室は住持・役僧の居所として藁の場となる。近世禅宗庫裡の特色は, 寺の炊事, 喫飯, 執務等の施設に留まらず, 公的接客のための書院を付設して寺院経営の主要な施設になった点である。

玄関は, 格式の高い地方の近世臨済宗寺院では, 本堂, 庫裡と共に寺の重要な施設となって, 外護者等の参詣に備えている。宮城県松島の瑞巖寺のように大檀越をもつ寺院では, 本堂(方丈)内部に上段の間を構えて, 玄関は庫裡の反対側に置かれている。ところが地方寺院の多くは, ここにみられたように庫裡に書院を付設して, 本堂の仏事法要と書院での応接に対応出来るように玄関を

2つの建物の中間に設けている。

山門は、四脚門の簡素なものであるが、境内の諸堂とよく調和しており、これを薬医門とせず四脚門としたのは寺院の格式を示したものとみてよからう。

更に、これらの寺院構成は、近世臨済宗寺院の格式ある地方寺院の配置構成に共通する次の3つの特色を示した。その第1は、本堂、庫裡、玄関の主要建物は玄関を中に挟んで横一列に並び、建物の前面を略揃えている。第2は、本堂は前方に中門を備えた塀によって囲まれる前庭をもつ。第3は、山門から入る主要動線は玄関に通じて、山門は本堂の中心軸上には置かれない。

以上が定勝寺の建築の特色といえる。そして、こうした寺院構成は中世末から近世初頭に創立された京都臨済宗の塔頭寺院と共通する多くの点を見出す。それは、この時期の塔頭の多くが本来の祖師を祀る塔所としてより、むしろ創建に係る外護者を祀る菩提所として成立しているのであるが⁽¹⁵⁾、地方においても同様に臨済宗林下の教団が各地に勢力を拡張してゆく中で、地方の豪族や大名に結びつき菩提所として成立した事情と一致し、両者の寺院構成の類似性はそうした成立事情にもよるのであろう。

〈注〉

- (1) 寺記によると『當寺ノ儀ハ後小松院ノ御宇嘉慶年間朝日將軍木曾十一代ノ裔孫右京太夫親豊為祖先追孝創立寺領若干寄附ス開山初屋和尚云々』
- (2) 寺記によると『第三世宏喜和尚代文安五年水災ニ罹リ寺中悉ク流失其跡字寺中島ト唱ヘ今畑地アリ因茲敷地ヲ轉シ後花園院ノ御宇享徳三年甲戌四月距今四百三十五年前木曾十四代ノ左京太夫家賢當地ヘ再建開山ヲ香林和尚トス都テ寺領等先規ノ如ク被附置云々』
- (3) 信濃資料、第9巻、300頁『定勝寺造營開之事、堅金吾被仰候間、宮松殿渡被申候、於己後者不可有煩候也、仍狀如件、文明十五年二月九日、越後守家盛』
信濃資料、第9巻、506頁『定勝寺造營開之事、木曾中之商人示大小共ニ無沙汰なく沙汰可有候、若遼背輩者候はば、承候々、かたく可致成敗候、恐々謹言、延徳三年辛亥六月廿八日、義定』
このように造営費用の徴収に係る資料が残され、貴山和尚代まで造営が続いたことが知られる。
- (4) 信濃資料、第12巻、410頁『浄戒山定勝寺佛殿上葺、天心住山之内永禄五壬戌五月朔日始之（後略）』

- (5)(6) 信濃資料、第13巻、215頁『當山客殿上葺、永禄十一年戊辰卯月十五日ヨリ始之、天心住之内（中略）翌年午年、山門、惣門、鐘鼓堂之上葺畢（後略）』
- (7) 信濃資料、第13巻、496頁『當山風呂建立元龜三年壬申三月十日初同廿六日造畢（後略）』
- (8) 信濃資料、第14巻、10頁『佛殿并奥縁壁、天正二甲戌二月十日ヨリ番匠手間、大工親子七十人、吉川彦八十二人、二子荷五十人、鍛冶廿五人、合而百六十人（中略）佛殿唐戸造建、旦那齊藤丹後守殿内家 番匠手間卅人、四月十七日ヨリ至五月四日造畢（後略）』
- (9) 信濃資料、第15巻、19頁『惣門建立之 天正九年辛巳從二月十二日至卯月六日、造用番匠手間誌之（後略）』
- (10) 慶長3年の再建は、寺記によれば『開基親豊公の墓所に近き義在公の屋形跡』に行なわれたとあるが、昭和15年に境内付近より室町時代とみられる五輪塔が発掘されたと云う。
- (11) 国宝・重要文化財指定建造物目録、文化庁文化財保護課
- (12) 拙稿「東海地方の近世禅宗寺院の構成」(1)(2)、日本建築学会大会学術講演梗概集、昭和60年10月
- (13) 妙心寺の学僧無著道忠（1653～1744）が正徳年間に著した禅林象器箋によると上間について『凡ソ人、堂ニ嚮フニ、己が身ノ右ヲ上間ト為ス。法堂・方丈ハ南ニ向ケバ則チ東』また下間は『己レガ身ノ左ヲ下間ト為ス』と記している。中国禅院の制からも東班は西班の上位となり、筆者も向って右を上間、左を下間とした。一般に京都の塔頭方丈では、玄関、庫裡に近い室を下間と称し、この逆を上間とするが、この呼称からすると「礼間」、「書院」が下位、「檀那間」、「衣鉢間」が上位となって、本来説法する住職が上位で、これを受ける賓客が下位であるはずであるが、中世末頃からの社会的変革期を迎えて、外護者の庇護のもとに寺の経営をせざるをえなくなった塔頭寺院では、開基や大檀越の賓客を上位とする呼称の変化が生じたのであろう。
- (14) 拙稿「東海地方における近世臨済宗本堂の研究」（その1～その6）、日本建築学会大会学術講演梗概集、昭和55年9月～昭和61年8月
- (15) 川上貢「日本中世住宅の研究」禅寺塔頭方丈成立過程の考察P.297～P.309

（受理 昭和62年1月25日）